

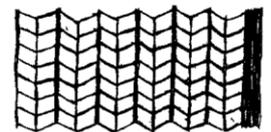
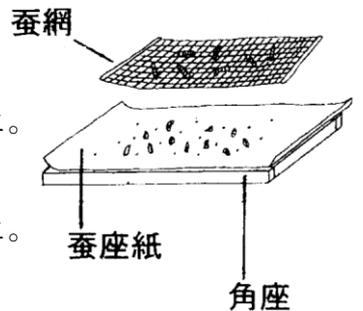
# 副業と出稼ぎ①

## —養蚕道具—

木綿生産の機械化に伴って、農家の副業の中心は次第に養蚕へと移り、農家の生活を支える大きな収入源となった。蚕の飼育には、成長に応じた用具が必要であり、エサとなる桑の葉の大きさや与え方も発育段階によって異なった。また、良質の繭を作るためには、風通しや室温などにも気を配らねばならなかった。

出来上がった繭は毛羽をとって出荷した他、自家用の繭は、真綿にしたり、糸にして反物などにした。

- 桑摘かご…左右にひもが付いており、背負って、摘んだ桑の葉を入れた。
- 桑摘爪…人差し指か中指にはめ、葉柄を親指の腹に押さえるように摘んだ。
- 桑切りばさみ…小枝の刈り取りや桑の木の剪定などに用いた。
- 桑切鎌…桑の根元から枝ごと切り取るために用いた。
- 桑切庖丁…枝についた葉をそいだり、細かく刻むのに使った。
- 桑もぎ…桑の葉を1枚ずつ摘む代わりに、切り取った枝を爪の間にはさみ、手前に引いて一度にこき取った。
- 角座…竹を張った木の枠で、蚕棚に載せて蚕を飼育した。
- 蚕座紙…角座に敷く紙で、ふんで汚れると乾かして再び使用した。
- 蚕網…ふんを取る道具。蚕の上に被せ、網を通して上に上がってきた時に網を持ち上げて、蚕座紙についたふんや食べ残しの葉を片付けた。
- いあみ…大きく育った蚕用の網で、蚕網よりも網目が大きい、使い方は同じ。
- まぶし折機…蚕が繭を作る場所としてのまぶしを作った。
- 改良まぶし…山形に折ったわらを針金で留めたまぶし。  
丈夫で折りたためて、何度も使えた。
- 繭…蚕がさなぎになる時に作り、絹織物の原料となる。
- 毛羽取機…繭の中心部が商品となるので、表面にある毛羽は金属棒に巻きとって取り除いた。たまった毛羽は売ったり、自宅で紡いで糸にした。
- はりかご…病気の繭やさなぎになる前に体が透き通る蚕の選別に用いた。
- 座繰…鍋で繭を煮て糸口を集めて1本の糸にし、糸車に巻きつけた。



## 副業と出稼ぎ②

### 一万歳と出稼ぎ

昔の生業は農業が中心であり、海岸沿いでは漁業も行われたが、農業や漁業だけで生計を立てていくことは、困難であった。

もともとの地には、新春に太夫と才蔵が一組となり、新年の祝言と家内繁栄を唱えて、家々を回る万歳が伝えられていた。農閑期にはこの万歳の他、黒鍬稼ぎや出鍛冶などの出稼ぎが盛んであった。凶作や不作の年には、万歳稼ぎの人数が飛躍的に増加したと伝えられている。

●太夫…室町時代、庶民の儀礼的な服であった素襖を簡略にした小素襖と、裾の長さを短くして踵までに縮めた袴を着て、頭に烏帽子を被り、手に扇子を持った。おめでたい歌詞を歌い上げながら舞い踊った。

●才蔵…現代の着物と同じ型をした黒色の小袖と裁つけを着て、頭に大黒頭巾を被り、手に鼓を持った。鼓を鳴らして拍子を取り、掛合いをしながら太夫の歌と踊りを盛り上げた。



『張州雑誌』より

●つづら…出稼ぎに出る時に衣類や道具を入れる箱。

●天秤棒…片方につづらを縛りつけて肩に担いだ。

●六條万歳本…万歳の歌詞が書かれた教本。尾張万歳には5つの万歳があり、その中でも六條万歳は岐阜県美濃地方の浄土真宗の家で行った。

●万歳覚帳…万歳稼ぎに出る時に付けられた日記で、日付と宿泊地、使ったお金や買った物などを書き込んだ。